

# 海岸タムシ

発行日 毎月十日  
 廣告料 一行五十銭  
 購読料 一ヶ月十銭  
 編者 福島縣平野町 城山  
 發行人 大畑 鈴一郎  
 發行所 海岸タイムス社

健平内開  
 康藥局  
 電話四〇四〇  
 番

## 縣下建築界の雄

### 中山吉之助氏

中山吉之助氏は石城郡上遠る事業に對しては誠心誠意野村の出身にて長するに従ひ努力振であり多數の配下ひ建築界に投じ今や縣下に指導し幾多の事業に成果於ける有数の建築請負業とを納めつゝある手腕識見共して其名を成して居々氏に既に世間周知の事實である今日の地位に達する迄には一面頗る仁俠に富む今真に奮闘努力の賜ものであ後の活躍と健全を祈る。

## 本邦奇術界の明星

### 名天勝一行來

主幹伊藤一氏經營の萬國MAGIC聯盟名華天勝一行五十餘名は遠く臺灣、滿洲、朝鮮及各地巡業中の處當月中旬先代の十三回忌追善興行の爲め當平市聚樂館に於て三日間上演致す由、本邦奇術界稀れなる大一座にて豪華な衣装及其他目下續々新調中なれば開演の曉は壯麗目を奪ふばかり其の賑ひ今より思ふべし  
 尙出征軍人家族一戸に對し慰安の爲め無料入場券一枚宛つ進呈する由

## 模倣と隨感

凡そ人間は自身勝手のもは他の不都合など頓着せぬのは己の都合の爲めには勿論、己自身にとつても

常に矛盾、撞着、無理、滅斷の語である山に登ると云法のみ行はんとする誰ふ言葉が昔から立派にあるも貧乏を好くものはない然にも拘らず今更ら外人の眞るに濫費する若くは怠ける似をして征服など云ふ言誰も病氣を好む者はない然葉を用ゆる必要はあるまいも酒好きは酒の爲めに餅好と思ふ、次に大御所とか御餅の爲めに皆我が嗜む曹子とか云ふ言葉にも感心もの、爲には病氣をも辭せ出來ない一寸毛の生へた様ぬ者が少くない又長生をすな者何々の大御所と云ひる事は誰も嫌ふ者がないが其の息子の事を直ぐに御曹老人と呼ばれる事は誰も好子など云ふのは餘りにもまない、斯く一々例を擧げ仰山過ぎはしまいか又北日て見ると極めて可笑なこと本アルプス、日本ラインなどあるが其れを平氣でやつと日本の風景をわざと西てゆく處に又所謂人間味洋の地名とちやんばんに名なるものがある。何人にも付くもの如何なものであ好き嫌はある之は當然な話るか木曾川にして靈あらばであるが近頃よく雑誌や新木曾川で澤山である、槍の聞などに征服といふ言葉が穂高にして靈あらば槍の穂使用されてゐる第一人間が高澤澤山だ、畏れ多くも人間を征服するなどと云ふ治天皇は何事も常規常例を事は寔に以ての外である又重んじ給ふで徒らに新規異登山する事を山を征服する常は好ませ給はなかつたとなどと云ふ事は實に言語道洩れ承る。

## 家庭に於ける

### 水道使用上の注意

水道は川水湖水を原水とし多い、炭酸瓦斯及び酸素をて、之を沈澱地濾過地を通過してある上水は鉛管内過せしめ浄化して鐵管を以て於て鉛を腐蝕しこれを溶て市中の家庭に給水して出するから暫く該管内にあるのであるが、家屋内導水りし水は難用に使用し、後管は鉛管を使用することが飲料用に供するが安全であ

る、然し東京の如き給水の内のものなら夜中気温低い不充分なる都市に於ける市間少し宛水道口から水を流民はお互に注意して水道の出せしめて置けばその憂は空費は防がねばならぬ又冬まぬかれるこの水を大なる季寒冷の季節には水道管内器に溜めて置けば不時の失の水が氷結し屢々鉛管を破火の場合大いに役立つこと壞する様な事があるが、家がある

閑静な室内  
 旅館 宮田川  
 電話 茨城縣助川町 二四一番

鈴木片濱自動車部  
 和泉屋旅館  
 福島縣平市 電話二二七番

洋食と喫茶  
 調理人は東京東洋軒仕込  
 平市 田町  
 電話 福壽軒

平電力株式會社  
 取締役社長 栗原欣次郎  
 電話 二九七番

大衆的の  
 富士食堂  
 電話 六七七番  
 平市聚樂館隣

出前迅速  
 鐵扉及諸機械製作、修理  
 吉野鐵工場  
 平市鍛冶町

銘酒 清州釀造元  
 鷺清昇商店  
 電話 三番  
 常磐線植田町

小兒科  
 外科  
 光線科  
 内科  
 前田醫院  
 電話 二四番  
 植田町本町

食事  
 喫茶  
 酒場  
 兼ねた  
 レストラン  
 サロン  
 日本曹達株式會社  
 小田鑛業所  
 福島縣石城郡好間村

洋服は  
 なかやへ  
 最新型の冬服澤山入荷致しました  
 注文並に既製品  
 赤かや洋服店  
 電話 二〇三番

